

様 式 F - 7 - 1

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成 26 年度）

1. 機関番号

3	2	6	0	4
---	---	---	---	---

 2. 研究機関名 大妻女子大学

3. 研究種目名 基盤研究(C) 4. 補助事業期間 平成 25 年度～平成 27 年度

5. 課題番号

2	5	3	7	0	5	2	7
---	---	---	---	---	---	---	---

6. 研究課題名 日本語の自動詞構文と意味に関する研究

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
1 0 2 0 1 8 9 9	フクシマ ミドリ 福島 みどり(天野みどり)	文学部	教授

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9. 研究実績の概要

本研究の目的は、「構文」の意味という慣習的な知識が、実際の言語理解・言語生成のプロセスにおいて重要な役割を果たすということ、日本語自動詞構文の考察を通して明らかにすることである。

本年度は、自動詞構文のうち状態変化自動詞を述語とする「のが」構文と、接続詞的な「それが」を冒頭に持つ文とを考察対象とし、その関連性を明らかにした。接続詞的な「それが」を冒頭に持つ文の中には、「それが」の「が」が主格助詞だとするとそれを統括する述語部分が無いように見えるものがある。そのため、「それが」の「が」は主格ではなく、「それが」全体で「しかし」「けれども」に相当する逆接の接続詞として定着しているとも解釈できる。本研究では、書記言語・音声言語の両方のデータで接続詞的な「それが」を冒頭に持つ文の文脈、意味を観察した。その結果、「しかし」「けれども」とは異なる文法的特徴・意味を有することが明らかになった。それらは状態変化自動詞を述語とする「のが」構文、すなわち「サマ主格変遷構文」の持つ特徴・意味と同様のものであり、両者には関連があるとした。

この研究の結果、サマ主格変遷構文の構文的知識が、二文以上の接続関係に貢献する言語形式、すなわち、談話文法上の機能を有する言語形式へと、拡張的に使用されていることが明らかになった。特に、音声言語データからは多様な接続的意味が観察され分析できていないものがある。それらの分析は今後の課題である。